

2017年度GTセミナー リーダー研修2017 2017.11.27～11.29 後編

第43号 2017年12月25日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

セミナー2日目

2017年11月27日～29日にリーダー研修2017が東京都
千代田区のTKPガーデンシティ竹橋にて開催しました。

リーダー研修は、保育環境セミナーのステップアップ研修として、
各園のリーダーの先生方が参加されるセミナーです。

園での課題や様々な問題を「リーダー」という立場から、
どう解決していけば良いのかを探っていくセミナーを行いました。

全国各地で、さまざまな新しい保育への挑戦を行っている先生方、
同じ課題に直面している仲間と共に保育を深めていきました。

1日目 2017年11月27日(月)

- 10:00～ 新宿せいが子ども園見学
- 13:30～ 講演①：藤森平司代表
- 15:15～ グループ討議（発表＆質問）
- 17:30～ 意見交換会
- 19:30～ 1日目研修終了

2日目 2017年11月28日(火)

- 9:00～ グループ発表＆質問
- 13:00～ 講演②：森口佑介氏（京都大学大学院教育学研究科）
- 15:15～ 特別講演③：森口氏×藤森代表
- 16:00～ 2日目研修終了

3日目 2017年11月29日(水)

- 10:00～ 新宿せいが子ども園見学





講師著書：森口佑介氏

2014.3.10 (新曜社)

●過去のバックナンバー

第40号

築120年古民家『聴福庵』⑩

第41号

築120年古民家『聴福庵』⑪

第42号

リーダー研修2017前編

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>

セミナーを終えて思うこと

Q & Aの時間は保育環境セミナーのプログラムにもあり、毎回アンケートの中にも、もっと時間を取ってほしいなどの先生方から反響のある時間です。

今回のリーダー研修にも同様にQ & Aの時間が設けられました。

保育環境セミナーでは2時間と限られた時間の中で行われるのですが、リーダー研修では、各園の先生同士が自分たちでもその悩みを解決できるようにとディスカッションの時間を2日間に渡って行えるようにプログラムが組まれています。

記録を取る中で、やはり保育環境セミナーとは違う悩みや課題が、藤森先生に寄せられます。質問として多かったものが下記の3つです。

- ①若い先生やパートの先生に見守る保育をどう伝えるか。
- ②若い先生たちから意見が出てこないのだが、どうすればいいか。
- ③給食の時間に戻ってこない子をどう見守り、声掛けするか。

今年度の保育環境セミナーでも、このような質問を取りあげさせて頂いています。ですが、藤森先生はリーダーに寄り添った考え方を示されているように感じました。

保育園にそれぞれに役割がある中で、リーダーとしてどうあるべきかを示しつつ、リーダーの先生方を見守ることで、きっと多くの園でまた、見守りの輪が広がるのだらうなと感じるのです。

なぜなら、今度はその先生方が園に戻り、職員を見守り、その先生が子どもたちを見守っていくのだから、そんな意味もこのセミナーには、あるのだと、研修を通して改めて感じました。

(報告者：株式会社カグヤ 奥山)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、QRコードからお願いします。

Q & A

セミナーにご参加頂いた園のリーダーの皆様からたくさんのご質問が寄せられました。その質問について、保育環境研究所ギビングツリー代表の藤森先生から、リーダーとしての考え方・在り方を示して頂きました。

※質問は挙手順に行われました。(A～Jの全10グループ)

Eグループ

若い人と年配が組んだときに上手く回らない。パートが多く、どう見守る保育を伝えていけばいいのか。

01歳クラスの職員配置を新宿せいが子ども園ではどうしているか。また、今日の活動(新宿せいが子ども園)の先生方をどう職員配置しているのか。

新宿せいが子ども園職員 1歳担任：1歳児クラス30名欠席なし。0歳児が2人休みで19名。職員は1歳児6名、0歳児は1人12時出勤がいたため、フリーの先生が入っていた。ゼッケンを今日初めてつけて動いてみたが、1～6番までの動きの把握は大体できていて、クラスに大人が分散していたと思う。子どもたちが順繰り自分のペースで動いていくのが基本スタイル。先生たちが日ごろ理解しているのは、1人ずつの発達段階を理解していることでサポートがしやすい。低月でまだ理解していない子にはサポートしていると思うが、友達同士の関わりで荷物をしまえとか、自分の支度も出来るとか、そういうことを理解できていて、できる子たちには遠くから見ていたりする。安全面に関しては、それも同じでこの段差を踏くだろうとか、これくらいだったら大丈夫とか、園庭だったらこの滑り台一人で上って降りてこれと思ったら離れてみる。それが少しガツガツした子とか押しちゃう子がいる場合は、そばによる。安全管理も子どもたち一人ひとりの発達、性格、気質から今起きるだろう場面の想定を先生たちはしている。

藤森：子どもの姿を理解して重点的に変えている。曜日によっても変えていて、どこで手を出すかを朝や昼に話をしてけがをしやすそうだったら変える。夏過ぎに危ない場面があった。子どもと距離を置いていたら危ないことがあり、夏でどうやら発達が戻っているので、早めに手を出した方がいいと確認し合った。子どもの姿を見て、どの程度手を出すかを日々の中で話し合いをして、もう少し離れていた方がいいねとか、誰かついていて方がいいとなると、全体の中でその時間うち落ち着いているからと2歳の先生がヘルプに入ったりしている。全体の姿を見て何処を丁寧に見て、子どもにどこを任せるかを話し合っている。均一で見るとかではない。けがをしそうなときはみんなで話し合って、怪我をしそうなので先生が必要とか、毎日朝会があるが前の日のヒヤリハットを話している。この子にはこの時間はいつもより目を掛けて見てくださいとか、その日や子どもによってどこを中心にするかを見ている。すべての職員の中で、手の空いていると言ったら変だが落ち着いているクラスの先生がヘルプに入るようにしている。

Dグループ

せいがさんのチーム保育を見て、特にパートの先生が悩んでいてもう少しわかりやすく提示してくれないか、箇条書きしてくれるといいとかあったがそこまで細かくすると難しかったり、パートさんは毎日違うクラスに入ることで毎回違う動きをしないといけない。仕事に入っても翌日は違う仕方かもしれないもっとわかりやすくという話が合った。パートの気持ちを汲めていなかったねという話になり、そういうところを考えることで働きやすさの提供や自分にも置き換えることができるという話ができた。

藤森：パートさんの役割、新人の動きについてだが、ある通信を読んでいたら障がいの子の巡回の先生がある原稿を書いていた。ある園に行った時に現場で障がいのお子さんが給食を配っていた。その子がある子に配るのを忘れてしまった。障がいの子が残っていたのでそれを食べてしまった。そうしたら、園長が「この子ってこうなんですよ」と言っていた。配られていなかった子は自分のがなくて泣いてしまった。園長は「自閉症で発達障害なんです」と言ったら、巡回の先生は「何で配られなかった女の子はないと言えなかったのか」。障がいは廻りが起こしているのではないかと言う記事があった。先ほどの怪我もそうだがニュースになることがある。うちの職員は「他の子はどうしていたのだろう、何で言わないのだろう」と思っていて、集団なので気づいた子が言うはず。注意するような子どもの関係を作っているかどうかだと思う。例えばパートで動きが分からないとうちの園で1, 2番の動きが細かく書いてある。父親保育をするときに、そっくりするためにはじめて先生が表にした。ある時それを知らないで入ったお父さんが、どう動いていいか分からなかったが全部子どもが教えてくれたと言っていた。何で子どもがパートの先生に言わないのだろうと思う。こちらから一方的にすると分かったら分からないが、突然入っても迷わないはず。ただ人の役割までやってしまうことがある。新人とベテランのチームワークの話だが、当然新人は保育が分からない。わからない分、新しいものを持っている。経験者は色々な経験を持っている。ベテランはどんな場合でもフォローできる。まず新人の活動を優先的にさせ、そこで足りないところをベテランが補えばいい。新人にああしなさいではなく、パートさんもそのままでいい。ただ足りないところは経験者が知っているので、そこを補えばいいのだと思う。補うことを見ることで、あそこが足りなかったと学んでいく。注意されてやってもそれだけになってしまう。あそこが足りなかったと学んでいくといい。うちでもパートさんというよりは、資格がない人がいる。1.2.3.4番と役割がある中で4番にパートが入ることがある。今はパートも含め、3番が抜ける時はそこに入ることになっている。子どもに沿って動けば2, 4番の先生がフォローしてくれる。こういうことをすればいいのだと学んでいる。子どもではなくて職員のチームの良さだと思う。それには子どもが率先して言ってくれる。うちの場合は1歳でもどんどん動く。突然入ったバイトでもできると思う。パートさんには無理に子どもを動かそうとせず、必要なところをやってもらう程度でいいと思う。わかっていないと思っているからこそ、そうやってしまうと思うので、大丈夫と言ってあげた方がいい。

Fグループ

経験のあるパートの先生は、手が空くと抱っこしてしまい、どう伝えればいいか迷っている先生がいた。マニュアルを書いて表にしたり、ケース会議で主任やリーダーが入り伝える場合もあった。そういう会議がないと陰口になってしまうので、小さいことでも言いあえることが大事と出た。若い先生は伝えられないという

意見も出たが、そういう場合もリーダー主任がその相手の性格を見ながら伝えていきたいと思いますという話が出た。特定の人に言うのではなく、全体に伝え改善ができないところは個人的に伝えることも大事ではないかと話し合いでなった。

藤森：パートや年配の先生に手伝ってもらおうとそういうことが起きる。保育者はハラハラ見ていると思う。パートという考え方がこれからの時代、大切になってくる。パートというお手伝いという考え方があるが、外国では時間が短い正規としている。パートでも有休が認められ、研修をしないといけなくなり、時間が短い正規職員という風に時代的になってくる。責任がなくてお手伝いだったがそうではなくそうと、経済界ではそういう動きになっている。どの辺までできるか分からないが、一緒に研修をして話し合いをして、正規と同じようにしていくことは大事になってくる。有休を貰えるようになってきている。パートというのを考えていく時代かなと思う。その中でパートだからという言い方をパートの人がしてくることがあるが、きちんとした保育者としての認識を持ってもらわないといけない。それぞれの立場があって、夕方だけであれば抱っこする人がいてもいいかもしれない。その人の役割として、可愛がる人がいてもいいかなと思う。若い人が意見が言えないというのはあると思うが、うちの職員に聞いてみたいと思う。せいがの森、新宿せいがの立ち上げたときも一緒に働いていた。園のお局さん。いいお局さんとは何か。

新宿せいが子ども園職員：もう一人Aという男性職員がいるが、ベテランと言われる中でやり過ぎない、頑張りすぎない。怒られるくらいでいいのではと思っている。ベテランが頑張りすぎてしまうと、保育とはこうだとなると、引いてしまうのかなと思う。ベテランは一言言っただけで10,100の影響になってしまうので、同じ目線でいられるよう緩くいる。提出物を遅れてもわざと最後に出すという技もしています。(笑)

藤森：もう1人の男性は、自分がやってきたことを伝えるのは自分のやる事がなくなるということだから、ベテランになると保育室で寝ていればいいと言う。彼女は話を聞いて盛り上げる役で、こちらから先に言うことはない。ベテランは話を聞くことが役目。飲んだら特に聞くようにして聞いて聞き上手。ベテランがありがたい。園の職員が今日二人来ているが、何かを決める時はこのベテラン3人に話すし、注意したいときは職員には言わず、その3人へ伝え相談をしている。特にベテランとしての役割があるわけではないが、本人が注意して影響力があることを承知して言わないようにしていることかもしれない。逆説的に緩く言わないとしているのだと思う。私の園に臥竜塾という勉強会をしているが、新人が私に対しての印象が「思ったより絡みやすい」と言っていた。ある意味では、自分に自信があればいじられても平気。自信がないとムキになってしまう。ベテランは堂々として、長くやっているのだから、ちょっと言われてもどうってことはないのだから、どんと構え必要な時には助言をしてあげる。リーダーは肩書ではなくて、ついていきたいと思える人。肩書ではないのでそういう人になっていくといいと思います。

Ｊグループ

異年齢を進める中で、朝のお集りや絵本を読んだりする中で、異年齢の子たちへのアプローチが難しい。

3歳に合わせると5歳にとっては簡単で最後まで話を聞けない子や、逆に5歳に合わせると3歳には難しかったり、最後まで聞けないことがあり難しさがあった。絵本だけでなく外の活動でも同じ遊びをしていても、5歳ができることに合わせてしまうと3歳児は難しく、別の遊びがはじまってしまいその点について聞いた

い。休憩の取り方、せいが保育園さんでは保育から離れる時間はどう作っているのか。保育の現場しか見ていないが、それ以外にも事務作業やPCに向かう時間もあると思う。職員がいる中で時間をどう配分しているかを聞きたい。

藤森：異年齢の考え方で、私が絵本を読む時に理解の仕方が違うのにと考えたのが、異年齢を始めたきっかけ。日本は4月生まれと3月生まれの子を一緒にしているのに何で一緒にしているのかと思った。理解度に合わせたら、逆に年度で分けないで発達で分けられると思った。それが私が異年齢を始めたきっかけで、0歳児は今1歳と10カ月くらいになる。今は歩いて走り回っている。それなのに先月生まれた子を一緒に保育をしているのが日本の保育。活動を大きく3つに分けて、外で遊ぶときに発達で違う遊びをさせるなら、ここは跳び箱10段飛べる子、ここは5段、こっちは3段としている。3歳〜5歳の子を10段を飛ばせていたら難しい。発達に沿って用意すればいいと思っている。クリスマスの飾りを作る時に、3歳は簡単なのを作らせ、5歳は難しいのを作っている。3歳だからと言っても直線切り、曲線切り、形切りできるものを用意して、自分が作りたいものを作れるのをすることだと思う。例えば、絵本をどんな意図をもって読むかという時に、この本の内容を理解してもらいたかったら、発達によって理解は違う。その場合は3冊選び、聞きたい子が聞けばいい。3歳だから簡単なのと分けるほうが難しい。例えば、うちに区役所から指導が来た時に、「異年齢だけど、年長だけにしてください」と言われた。年長の方が難しい話を聞けるか分からないよねとなり、3.4.5歳の子に「難しい話でも聞けると思う子は3階に来て」と言った。その中には3歳もいれば4歳もいた。区役所の人には年齢で分けておきましたと言った。そういう意味の異年齢が先。発達が違う子に同じことをさせようとするのではない。絵本について疑問に思うのだが、保育園には〇歳向けと書かれている。私は反対で、いい本は0歳は0歳なりの楽しみ方があるのが本当の絵本だと思う。絵を楽しむ子もいれば、ストーリーを楽しむ子もいる。この内容によって思いやりを感じてもらうなら、3つ用意して子どもにどれを聞きたいかと選ばせればいい。異年齢の在り方は、異年齢をやるのではなく、結果的に同年齢でもいいと思う。設定保育と言われている時だけだが、意図して先生がカリキュラムを組んでする場合は、年度で分けて発達で分けた方がいい。そうすると異年齢になる可能性があるということ。異年齢の考え方が普通と違う。3.4.5を一緒にしてさせようではないので今日、0.1歳が散歩に行きましようとなったら、0歳で散歩へ行く、1歳で散歩へ行っていたが、今日は歩き始めた子に歩く楽しみを感じましようとなれば、0.1歳を混ぜてするのではなく、課題に沿って集団を変えている。それから休憩時間だが重要なことが2つ。うちの場合は昼寝は賛否両論あるが2時間。寝ない子は静かな活動をしている。そのうちに1時間が休憩時間で、もう1時間は書類と会議。夕方会議をしたり書類を書いたり出来る限りしていない。ただ職場を離れるのは考え方があるが、本人が休憩できていると思えばいいのだが、お菓子を食べて休憩していてもいい。子どもがいても平気でお菓子を食べたりしている。もう一つ大事なのが均一にということなのだが、その人の生活の在り方が均一で同じ1時間ではないと思っている。例えばローテーションがあって、朝晩パートがいないので全員がローテーション。どの時間帯も0歳の先生がいる。ローテーション係りは、0歳はこの時間帯に配置してくださいというように配置をする。個人名はクラスで話し合いをしてもらう。子どものいる職員は真ん中しかいられない。若い人が早番遅番ばかりになる可能性があるが、平等ではないと言われることもあるが遅番だと12時出勤になる。よく職員に12時出勤だと好きな映画が観られるよ。美容院行けるよという。子どもがいる人は真ん中だと1日つぶれてしまうが、子どもを育てるのにはいい。早番だと15時くらいに帰って好きなこともできる。その人が自分の意思で心地よくできることが平等だと思っている。今日は早く帰りたいときは早番と言えればいい。そ

れが均等に早番が回ってくる必要はないので、今日用事がある人は補助の先生がフォローしたり、保育中にやってしまったり、保育中に行事のやり取りをしてしまうし、プライベートなこともそう。思いやりの中で心地よく仕事できるような環境を用意している。

Bグループ

新宿せいがの職員の皆さんを見ているといつも動きを手本にしたいと思う。4番の人が4番の動きができないときは5番がフォローに入るという話で、私の園ではいつも私がフォローしているとか、気づく人はいつも気づくということもあると思うが、新宿せいが子ども園さんはどうしているのでしょうか。幼児の子どもたちが外遊びをしている時に、給食の時間になるとクールダウンができず部屋に戻れない子もいる。職員も指示命令をしたくないから気づくようには促しているが何とかしたい思いもある。

藤森：いつも4番のことをしてしまうと愚痴を聞くことはある。その後にできるだけその人は何が得意なのか、どこがいいのかを言うのでここをいつもやってしまうけど、こういうところもあるよねとしている。なるべくいいところを見て活用すればいいだろうと同時にしている。私はあまり参加しないがよく飲みに行ったりしているが、いない人のことは褒めるが、いる人についてはけなす。出ないときに悪口言っているんだらうというのではないので、出来るだけいない人のことは褒める。言いたいことがある時は、いる時に言うようにしている。愚痴も聞くけどいいところも聞いている。クールダウンはなかなか助言できない。うちの孫はお集りにはいかない。行けというから行かないと言っていた。トイレも絶対行かなかったらしいが、行きたくないのに何でと言っていた。子どもなりに理由があったが、ある幼稚園を見に行った時に新人の先生に感心した。その園の園庭は土とかがすごかった。お部屋に入るようにみんな入っていたが3歳の子3人が遊んでいて、先生がシャワーのところで待っていた。そろそろまずいと思っていたら、若い先生は楽しかったでしょと言った。「うん！」と言ってその後はすごくやってくれた。みんなは早く行っているよという、ダラダラしていたかもしれない。共感して「楽しかったんじゃない」といようにまず共感してから言った方がいい。先に言ってからではなく、子どもの活動に共感して、それを分かってくれたと嬉しそうにする。共感すると同時に少しずつ約束をして5分だけ特別に長くするからねと、条件を付けてあげて特別感を出すということもある。いつまでも好きなようにしていいとは思わないが、子どももいいとは思ってはいない。どこかで言うだろうというところを区切りにしていると思うが、やりたがっている気持ちに共感して、何をしたいかを聞いてからその後にそれしたいけど、終わってからしようかと約束は後に付け足す。そこに共感してあげることだと思います。

Cグループ

日々の保育の中で異年齢をやっていると落ち着付ける時間が必要だと思うが、新宿せいが子ども園さんでの落ち着けるスペースをどうしているかをお聞きしたい。

藤森：昨日のことで少し考えたことがある。懇親会を含め課題になっているのが、お集りになっても来ない子をどうするかという悩みがあった。私たちが去年赤ちゃん学会で発表をした。覚ます力を育む保育、自分で抑制したり、我慢したり、集中している時にどう覚ますかを発表した。まず、子どもたちをいかに集中させるかとか、物事に熱中させるかとい

うアイデアの本は多い。そうすると保育園というところは次の時間、給食やお集りがあり、切りあげないといけないときがある。この時にどう切り上げるかという本はない。途中で終わりとか、やめてくださいという場面が保育園では多い。私たちの課題は環境に働きかける相互作用がある。自分でやめる力を考えるべきではないかをどうしたらいいかも、私たちの課題としても付けるべきではないかと思い発表した。現場は集中させるけど、やめさせないといけないときにどう、保障していくか。講師の森口さんをお呼びして、お話を聞くのはその所。本にも書いてあったのだが、兄弟で研究をした方だが、自分は小学校の時にやめられないタイプだったらしい。いつまでも遊んでいる。いすにずっと座っていられない。今だったら先生たちは嫌がるでしょうとあった。自分で行動を抑制する発達はいつ頃からどうなるかを研究をし始めた。現在大学教授のほとんどはそういうタイプで、すぐに入っているのはただの人になっていることが多い。有名なのが脳科学の澤口先生。自分はADHDだったと言っていて、いつまでも遊んでいたと言っていた。ある意味では特殊な行動をしていることはどちらから見てもどうなのか。部屋に入る人から見ると異常行動だし、言うことを聞く方が異常だと思っていたかもしれない。それでも保育園は集団なので一緒に動いていかないといけない。うちでもいろいろと研究をしている。まず一つが何でやめないかという、一つにはせっかくここまで作ったのに片づけたら、これをしないといけないというのがある。例えばブロックでもあとちょっとで大きなものになるのに、塗り絵もかなり時間がかかるものやっていたのに、ここでは中途半端になってしまうという気持ちがある。うちでまず取り組んだのが、大きい積み木の場合は片づけなくていい。1週間は続きをやるようにする。最初は続きをするという名札を掛け、中途なので壊さないでということをしていたが、今は作っているものは片さなくていい。もしその場所を使うなら、片さないといけないがそのままでもいい。塗り絵も途中のものを飾っておくと、取っておくこともできる。違う効果も分かった。途中を飾っておくとそれを見て参考に色を塗ったり、子どもの作品を飾るのは作品を大事にすることもあるが、次にやる子たちがそれを見て作品を作っていることもある。途中を保障してあげる。続きができる保証をするのが一つ。2つ目はあとちょっとで本が読み終わる時は区切りまでは待ってあげる。読み終わったらおいでと提案すると、次第に子どもたちは自分で区切りを見て、切り上げてくる。それぞれの区切りを見てくるようになる。読んでいる最中はそれを保障してあげる。よく使う手だが、先生が注意するとわざと来ないとか、逆らうことがあるので他の子どもや小さい子なら、年長さんに行ってもらうとか、子ども同士で呼んできてもらう。これは集団を使うという意味で、先生だけがそうするのではなく、そこに行って呼んでくるのも一つの手。今日みえる森口先生は、筆頭はマシュマロテストということも書かれていた。マシュマロを15分食べないでいるともう一つもらえる実験だが、待てるようにするには気をそらす方法がある。電車の中でもよく泣いている子がいるが、それを怒りつけるお母さんがいるが、一つは気をそらすことも大事だと言われている。気をそらして我慢をさせる。そのことだけを考えると我慢できなくなる。ほかのことを考えるということがある。いくつもあるが、もう一つは、これも一番大事なことが我慢できる子、できない子を見てみると、成育歴で影響があるとしたら、信用できる大人の中で育てられていると、待てるようになる。信用できない先生、後でやってあげるからと言っても、その先生が信用できなかったら今やってしまった方がいい。我慢した方がいいことがあると信用できる、待てるようになる。口先だけで注意している先生の話は言うことは聞かない。もし約束をするときは必ず応えてあげることが大事。それからもう一つは先の見通しが立つこと。我慢するとどうなるか。うちも最初の頃、お集りで出欠席を取り調理に報告へ行く。調理が報告を受けその数を作る。出席の名前で返事をしないと給食がない。どうなるかということをしちゃんと見通しをもたせる。1日の流れがちゃんと把握できるか。違う発想だが、給食に来ない子の話をしたが、もう一つ私だったらお集りに6人位遊んでいて来ない。私だったら瞬間に参加させることができる。どうするかというと、園庭でお集りをすればいいと

思う。ドイツではお集りではいろいろなところである。日本はピアノの場所であるが、ドイツは園庭やホール色々な場所である。楽器はギターやアコーディオンなど使う。園庭でやるかというよりも、それくらい柔軟に考えて欲しい。今日はみんなが遊んでいるから今日はなしとか、柔軟性を持たせる。園庭でお集りをすれば6人のところであるとうちの園の子から教わったことでもあるが、お集りの時に出席を取るのグループごとに座るが、黄色グループのところに青が入っていた。青の子は、ここがいいというのではないが、一人くらい違ってもいいかとなった。遅れてきた黄色の子が青の子がいて座れず、青の子はここを動かないと言っていた。普通はあっちに座りなさいというが、私はどうしたらいいかわからないから、みんなはどうしたらいいかと子どもたちに聞いた。年長の子が、残りが変わればいいと他の子が動いた。余計頑固になるのではなくて、次からはちゃんと行くようになる。絵画指導で他の園で園内研修をしていたことがあった。子どもたちが紙いっぱい絵を描かず小さく書くがどうしたらいいかと聞かれたので、私だったら紙いっぱい書けるようにできる。それはその子どもに紙の大きさを合わせた。そういう発想も必要。リーダーの方は経験も多いし、キャリアも長いと思うと、これまでに執着する可能性がある。しかし、そこを変えて見直してみるといい。根本が違う可能性がある。お昼を食べないときに午前のおやつはどうなのか、全体の生活を眺めてみたり、これまでやってきたことを見直してみるといいと思う。行事の考え方もそう。時代が変わり子どもが変わってきている時に、もう一度何のためにそれをしようとしているのかを考えるべきだと思う。明日見学に来る人が何人かいる。最後のお楽しみ会の予行練習の日なのであまりコーナーがない。しかし、予行演習を見るよりも、しない子や終わった子を見るほうが面白い。練習は練習で分かるが、終わった子はどうしているのかとか、そっちを怒らざるを得ないこともあるので、そこをどうしているのかとか、明日見て頂くとわかる。明日見学に来た人には、お楽しみ会のプログラムを見てもらうとわかるが、その日の出し物が書いてあるものではなく、その日までにやってきた経過を見せている。どんなふうに子どもたちが取り組んでいたとか、その日までの取り組みを見てください、そこが大事ですと親に知ってもらうためのプログラムになっている。長くなるとコメントを読むと当日の励ましになってしまう。本当の趣旨はどんなふうにこの日を迎えたかを書いてほしい。こんな風にして当日を迎えたのだと。日々が保育であることを知ってもらうために書いてある。行事の目的で発達を知らせるために、言語領域と表現領域を主に見せている。新しい指針にはなくなるが、発達過程のところをプログラムのところに掲載している。赤ちゃんの0歳児の発表は普段の保育をする。名前を呼ばれたら返事をするというのが発達過程の中に書かれている。それからもう一つ、幼児教育の特徴だが指針の中にはうまく言い表していないが、円滑の以降の中で幼児教育の違いが書かれている。それは小学校児童期の教育は学年ごとに到達目標が示され、教科ごとに示されている。小学校以降が教科ごとの到達目標を教科ごとに時間割に沿って行う。学年ごとに決められているので、学年という集団で授業を行うことが学習指導要領に書かれている。幼児期の教育は学年ごとには決められていない。これまでは概ねという発達が書かれていた。今回の改訂では、卒園するまでこういう姿にして下さいという方向付けしか書かれていない。年齢ごとに私たちは目標はない。発達の連続性と順序性がある。この順序をきちんとしていかないと発達していかない。一つは幼児期の特徴。今回はっきり書き表せた。到達目標の目標は、小学校以降は〇〇ができるようになるというのは知識技能の習得のこと。幼児期の目標は知識技能の基礎。この基礎は指針ではわかりにくい、〇〇を楽しむ、興味を持つとか感性を豊かにすることが書かれている。小学校へ行ったらできるようになることが基礎。感性を磨くとかが目標。行事は発達を見せると同時に学習成果を見せる場でもある。小学校での学芸会は、楽器が弾けるようになった姿を見せる。こんな風に劇ができるようになったというのが児童期。幼児期はこんな風を楽しんでいますよ、興味がありますよというのを見せるのが学習成果の発表。幼児期の学習成果、これは幼児期にこれが何で大事かという、それが小学校へ行ってできるように

なるためにはまず楽しまないといけないから。それを幼児期でするから基礎になる。昨日ヘッグマンの話をしたが、早くやることは短期的には効果があるように見えるが、長期的には逆効果。行事は何のためにするかを考えることが最初。それを保護者へ見せることはリーダーの責任でもある。出来るようにならなくていいと言っているつもりはない。まずそこに興味を持つことが基本的に大事。その姿を見てくださいということ。子どもが興味を失っているような練習を繰り返すべきではない。練習ばかりして素晴らしいことをしても、楽しそうでなければ意味がない。訓練すればだれでもできるようになる。楽しそうにしている姿を見せること。もう一つはうちのお楽しみ会は年齢別で行います。日本の年齢別は劇で同じことをさせていない。個人によってセリフの長さを替えられる。同じ年長さんでも、個人差が活かされるので年齢別でやっているので問題ない。合奏だけは同じことをさせることになるので、3,4,5歳で好きなものを選んで。ある園のお楽しみ会の話を聞いたが、太鼓に人気があった。どうしたらいいかを子どもに聞いたら、小太鼓をじゃんけんで決めた。大太鼓はプレゼンをして決めたそう。外れた子はどうするかというと、一つずつの楽器を触らせどれをやりたいかを選んだらしい。年長の子だったので、親が苦情を言ってきたので説明をした。親は太鼓が大きい方がいい思いがちだが、私たちはこれまで年齢別でやったら3歳は打楽器、リズム楽器からメロディーに変わっていた。大人になってもドラムをする人もいる。年齢で楽器で選ぶのはよそうとした。行事と言っても何のためにするかを話し合っ、これまでこうしてきたからではなく、きちんと話し合う。出来るだけ親の意見を職会で私は言うようにしている。そういう説明ができるならいいねというが、きちんと考えていれば親から何か言われても大丈夫だと思う。練習も子どもがつまらなくなるようなことはしない。子どもも練習で好きなことがある。本番で一番盛り上がるようにしているので、練習をさせないようにするのも大変で、散歩へ連れ出したりしている。飽きかけばいと思ったら、散歩に行ってしまう。子どもたち自身から練習をやりたいということ。今年の年長は、セリフを言いたい子が多くと困ると職員が言っていた。ストーリーが変ではと言ったら、子どもが言いたい子が多くて皆で作り上げていった。当日の出来栄ではないことを親たちに知ってもらうことが私たちリーダーの役目。普段からの保育に信用がないとだめ。中々、理解できないので普段の中から、会話の中に入れながら会話するとか、普段のすばらしさを伝えていくといいと思います。何のためにして、保護者に何を伝えたいのか、行事というのはメリハリとして大事なことだけど。当日だけが大事なのではなく、その日を子どもたちが迎えるまでにわくわくすること。年1回あるお祭りを毎日の単調な農作業も、もうすぐお祭りからあるからというように、楽しみでその日を迎えるようにする途中が大事だと思います。行事の本もありますので、行事の原点から見直す。よくある本は例が書かれているが私の本は、その行事が何であったのかということを見直すものになっています。もう一つは癒しの空間の質問があった。とても大切なことで、ご存知の方もいると思うが私は5Mを提案している。保育の大切なことを5つにまとめ、その筆頭にメリハリがある。保育の中にメリハリをつけましょう、日々の保育の中には行事がある。このメリハリは生活リズムを含め大切なこと。情緒の安定の中に、生活のリズムをきちんと持つことが情緒の安定を促すと書かれているが、1日の早寝早起きだけでなく、1年におけるリズムがあり、そのために必要なのが行事。行事があることでメリハリをつけるが、保育環境におけるメリハリで癒しのコーナーも用意すべき。広くて、いつも明るい中だけでなく、少人数で集まったり、一人でこもれたり、薄暗かったり、日常と違った空間を用意することで情緒が安定することがある。いつも先生に見られているだけでなく、段ボールで隠れられたり、押入れを改造して隠れるようにするとか、そういう場所をつくる。よくデンと建築で言うが、動物の穴倉のようなものを用意したりすることが、設計では大事だと言われている。保育園の中に設計上ない場合は、先生たちの工夫で段ボールで作るとか、いつでもみんなというだけでなく、ちょっとこもれる場所を作ることが必要。ドイツでは、ヨーロッパ全体ではやっているのが障がいの子を落ち着かせ

るグッズが用意されている。空間や音、光に対して敏感。私たちが聞く以上に騒音に聞こえたり、眩しかったり、圧迫感を感じたりする。そこで落ち着けるようにと、水がぶくぶくしたりするものが流行っている。ゆったりとミラーボールが廻るとかが、障がいの子たちにいいと言われ、そういう部屋が作られていることが多いそう。透き通ったスカーフみたいなものをつけたりすることが言われ、そういう研究者がいて、癒しの空間が用意されているので、日本でも、そういう部屋を工夫して作ると言いと思います。

Aグループ

研修でインプットしたことを持ち帰った時に温度差があるという話になった。職員間で話し合いをするときに分かる人と分からない人、日常の中でも阿吽の呼吸で動ける人と動けない人がいて、子どもには自主性と言っているが、大人になるとそこが難しかったりするが、そこがリーダーが大事ではないかという話が上がった。

藤森：最近、海老蔵がブログを書く中で、一つの出来事がある中で、見ている人によって感想が全然違う。捉え方が違うことが言われる。これはだからこそ、色々な人の見方が大事ということでもあるが、当然リーダーの考えを通して伝わるので、純粹に伝わることにはならない。それは、仕方がないが一つの見方であることを承知していないといけない。職員が違う意見を言ったときに、それもあると思わないといけない。それはもう一つのチーム保育の理由。一人の見方だけで、子どもを見ずなるべく複数で見る。児童表に変わるチェックは担任は決まっているが、一人で書くことは避け、みんなで話し合いをして、色々な観点を集約することで行っている。3.4.5歳は一人担任になってしまうので、そうではなく3.4.5歳の先生皆で話し合うようにしている。これはそれぞれ人によって見方が違う。それが正しいではなく、そう言う見方もあると受け止めないといけない。それを聞く力を持つことが大事。ドイツの話になるが、ドイツでは児童表や子どもの記録、保育日誌は保育士は書いていけないことになっている。何故かという、一人の見方だけでその子のことを表すことにならないとなっている。数年前から要録を小学校から出している。小学校の接続ということで出している。ドイツでどんなものを提出しているか、子どもの姿を伝えるかを聞いたら、出すことは法律で禁止されていると言った。幼児期の子どもの見方を出すと、小学校の先生は刷り込みを持ってしまうから伝えていけない。円滑な移行ができるのと思ったら、年長さんくらいになると週に30時間？低学年の先生が来て保育をし、後の300時間は保育園の先生が低学年に教えるそう。お互いに交換して、教えることで円滑に移行している。書類で連絡をしているのではない。実は小学校も児童要録を書いています。私も教諭をしていた時に書いています。改めて考えてみたときにまず一つ、持ち出し禁止の書類で校長室にあって持ち帰ってはいけない。なかなか書ききれないと持って帰りたくなるが持ち帰り禁止。前の学年の要録を読まないことになっている。読む時はその子が犯罪を犯したとかの時だけ見る。通知表はいいことを書きなさい、児童表は問題点を書きなさいと当時の校長に言われた。それが正しいか別にして、私が勤めていた時はそう言われた。通知表の所見欄にはいいことを書き、要録は誰かが見るものではないと言われたが、最近は開示要求に要録を見せるかどうか話題になっている。ドイツでははっきりしているが、日本はまだ書類主義で、あまり個人の主観で書かないこと、みんなの意見を踏まえて書いた方がいいと思います。私たちは小学校へ出す要録は発達経過記録を出す、私の園では3月に保護者と面談をして、親と一緒に小学校に何を伝えたいかを一緒に書いている。保護者と話し合って何を伝えたいか、これを面談をして書くようにしている。私は若い人に特に言いたいことだが、大学を卒業するまでにいる友達は基本的に気が合う人。気が合うのは同じ価値観の人。それは自分で選べるので、気が合わない人とは付き合わない。職場では気が合

わないこともある。しかし、仕事上では気があっていない人が必要。違う見方がいるからこそ必要。一人の先生が行動を見て、障がいではないかと言ったときに、私もそう思うでは救いようがないが、私が見たとき、こうだから違うのではないのという人が必要。だからあなたの意見が必要ということをリーダーが率先して、職員の意見を取りあげないといけない。その人の考えていることを基本的に認めてあげる。そういう意味でも広く、子どもの話ではないが、許容的に広く受け止める気持ちを持つべき、全部を一緒にしましょうというのは考えない方がいい。もちろん理念は一緒だが、やり方・方法は職員それぞれに話し合うことが大事。もう一つ例でこういうことが挙げられている。外国の話し合いの授業をＴＶで観たときのやり方だが、子どもたちに「お道具箱からクレヨン一本好きなものを持ってきなさい。」子どもたちに「何本ある？」「１本」「では、前の人とクレヨンを交換しなさい」交換して「手の中にクレヨン何本ある？」「１本」「頭の中で冬になったな？どういうところで冬を感じたかを頭の中で浮かべなさい。」「では、それを前の人と交換しなさいと交換した。」その後「頭の中にいくつある？」「２つ」。「これが話し合いですよ」と言っていた。話し合いは増えること、一つにすることではないというのを見たときに、こういうことが大事。一つにすることではなくて、考えを広げること、増やすことが大事。これをまとめるのが、リーダーであってほしいと思う。自分の考えを押し付けるのではなく、そういう考え方もあるんだねというところだが、次の問題はそれらの考えを、最適な一つの解にするのがリーダーとしての問題。やることは一つだったら擦り合わせて、最適な解を見つけないといけないので求められる。これからの学校教育の課題だと言われている。これまでは多様性と言ってみんな言いねだったが、その違いを乗り越えてお互いが納得する考え方。お互いに力がある。例え 180 度違う考えであっても、一つの解にしないといけないのが、グローバルだと言われている。多様性を乗り越えて、お互いが納得する解を見つけることが大事だと言われている。私は特に、北朝鮮は極端に違う考えを持っているが、一緒になって世界の平和を考えていかないといけない。納得する解を努力して見つけていかないといけない。日本にも多国籍の子が入ってくる可能性もあり、最適な解を見つけていくこともリーダーの役割でもある。それぞれの考えを認めお互いを納得する解を見つけていく。大変かもしれないが他の園から他の人から聞くことも大事。

Gグループ

環境の話や大人の動きがまだまだできていないという話が多くあり、昨日見学に行かせてもらったが、大人が流れるように動いていた。環境をカバーすることができていない話にもなった。上の立場になることで出来ないことを分かってきたり、職員のモチベーションをどう上げていけばいいかということになった。

藤森：職員がうちの園はもうできたと思ったらもう終わり。うちの職員もまだまだできていないと言わないといけないように、隣はよく見えるので、うちはまだまだだと思っている。皆さんの園も他の人が見るとよくできていると思う。職員には結構できているよということが大事。出来ていないように見えるが、うちなかなかできていると思うよと、職員には励ましてあげる。リーダーはまだまだと思うことが大事だが、その成果は上がっているよ、外から見るとできているよと言ってあげることが必要で、公開保育をすると褒めてくれ、たまには褒められることをして、園長はまだできていないというが私からするとそんなことはない。子どものために視点を变えているとしたら、多くある園よりも大きな改革だと思っている。ここに集まっている園はまだまだと思うかもしれないが、着実に変わっている。出来るようになって、保育園は新しい園児が入ってくるし、保護者も色々な人がある。その時々だけで一喜一憂せず、きちんとした考えを持つこと、励ますこともリーダーの役割。時代性もあるが、子どもが怪我をした時にそれくらい平気と言っていたのが昔、今

はよく我慢できたねということが大事。それをけなすこととほめて頑張らせる方法では今は褒めることが大事。無理におだてることはよくないが、本人がよくやっていることをほめる。よく言うのが過程をほめる。職員も頑張っている姿を、ほめる。何とかこういう保育にしようとする姿勢を評価するべき。リーダーは外から見るとこんなことができていよ、と見つけてあげること。そして、冷静にこれからのことを取り組んでいけばいい。私の園も褒められるが、まだまだ課題があって、だから保育は面白いと思う。次から次へと課題があるので私たちも年に1回他の園の見学をしている。皆さんの園もかなりきちんとやっているの、頑張っていることを認めて欲しいなと思います。

Ⅰ グループ

伝える難しさの課題があがった。どう思う？ということに対して、返答が帰ってこないことが若い人に多かったり、コミュニケーションをどう取るのかということで、ある人は自分が出来ないことを伝えると若い人も受け入れやすいということも出た。見守る保育をやっていく中で、その中で若い先生もパートの先生にもどう伝えていくか、言い過ぎてしまうこともありリーダーの難しさがある。伝え方のところが課題として挙がった。

藤森：1つは若い人をどうするかということもあるが、自分の若いころのことを考えるとなかなか言えなかった。私の園では2年目は行事の総責任者になる。責任者はやっていかないといけない。当然ベテランがフォローしていく。行事が終わって後片付けが終わると反省会をするが、若い人は感激して泣き出してしまう。なるべく若い人を主役にする。歳をとってくると大して手柄はいらないので、若い人を行事のリーダーにして、周りが手伝ってもよく頑張ったね、と自信を持たせてあげる。省楽塾というのを希望者だけが開いている。それを仕切るのが若い先生にしている。園の企画では若い人が言い出しにくいので、プライベートな集まりで企画をしている先生がいる。若い人が主役になれるような場を作れるといいと思います。若い人にどんどん言えということだけでなく、発揮できる場所、多くは手伝ってあげていても、本人の手柄にしてあげることが大事かもしれない。年配に対しては、私は基本的に見守る保育を始めたきっかけはブログにも書いたが、研究が昔と変わってきているから。一つは感性、もう一つは乳幼児の有用性。大人と子どもと異なっている。大人と違う存在ではないかということが分かって来ている。大人以上のものを持っているとわかっている。赤ちゃんは未熟な存在とされていたが、だから面倒を見ないといけないという育児観、子ども観があったから、年配の人たちはその中でそういう考え方を持ってる、そういう学びをしてきた。しかし、研究が変わってきていて、大人以上に力を持っていて色々なことができるのではないかとことがある。これをどう保障してあげるか。子どもの力を保障できるかということで、出来ないからやってあげていたが、最初に書いた本が『やってあげる保育から、見守る保育』と書いた。その時に編集者が「見守る」のではなく、「寄り添う保育」としてはどうかと提案してきたが、寄り添うというと子どもの有能性を保障するには弱いと思った。最初は「見守る保育」と提案したのではなく、20、30年前にディスカバリージャパンというTVをやってて数カ月の赤ちゃんでも足し算が出来たり、大小比較が出来たり、知らないふりをしているのでは思った。昔はやってあげていたのに、こんなにできるんだとショックだった。私は年配の先生にもショックを与えてもいいと思う。方法論として「見守る保育」をしましうではなく、本当はその元を知ってほしい。でも、なかなかそういう研修会がない。それがあってもどう保育に活かすかということもあるが、ブログに今書いているのが、『おさなごころを科学』するという、森先生の乳児が有能性である。大人と違った生き物で、外国では『哲学する赤ちゃん』という本を書いている先生もいる。大人が面倒を見ることがいかに失礼かということも分かってくる。手を出すことは決して赤

やんのためではない。逸話として聞いたことがあるかもしれないが、小学校の教諭をしている時に、偏食の激しい男の子がいた。食べるとしたら食パンの真ん中の白い部分。家庭訪問をしたら、お母さんが歯を使わせるのがかわいそうだからと、全部ミキサーにかけて食べさせていた。歯を使わせるとかかわいそうと聞いた時に皆さんどう思うか。これは子どものためではない。歯には役目がある。歯の役割を使わせることに意味がある。歯は大きく言って3つある。それぞれの種類を噛んだり、ちぎったり、すりつぶしたりするためにある。例えば、肉や野菜を食べさせ、穀物を出さないと臼歯を使わないことになる。子どもが大変だから小さく切ってくださいというが、小さく切ると前歯を使わなくなってしまう。飲み込めないから小さくしてくださいというのは、前歯を使わないことを要求していることになる。子どものためというのは、それぞれの能力を使わせること。歩かせるとかわいそうだから抱っこするでは歩けなくなってしまう。子どものためというのは、どういうことか、誰のためなのか気づいてもらうしかない。子どものためにやっていると思うが、時代的に変わってきている。分かってきていることは、昔からやってきた育児に戻って来ていると言われている。新しい育児方法が提案されてきたが、次第に昔の育児方法に戻って来ている。その1つが集団で保育すること、ジャレド・ダイヤモンドの本にも書かれているが、次第的に変わってきています。指針も時代によって変わるので10年ごとに見直しましょうと言われている。10年ごとなので特に乳児未満児が変わってきているので、今回重視されてきている。昔からやっているということがあるが、その昔とはいつからなのか。人類の進化から見て、新しい知見を知ってもらう。こういうことが分かってきているということをパートさんも、こういう研修を受けて欲しい。夕方だけだったら可愛がり過ぎてもいいかなと思う。良かれとやっていると思うので、本当のよかれが何かを知ってもらうことも必要かもしれない。

Hグループ

公園で遊んでいる時に一人の子が四角に入って階段で怪我をしてしまったことを話したり、言わなくても分かるよね、ということに安心をしてしまうことがあり、些細なことも確認し合うことの重要性を話したり、パートの先生方にどう見守る保育を伝えていくかということも挙がった。

藤森：私の園では再発を防ぐ。1回目は仕方がないにしても、1度起きたことに対してきちんと検証して、どこでどうなったのか、どう防げるかの話は大事。仕方がないではなく、どの場面で、どの相手の時に起きたかを話し合います。私の園でもきちんと文章でその対策を書いて、みんなで話して提出して周知する。朝会とかでも発表している。これを必ず前の日のことを発表しています。こんなことがあったので今後こうしていきますと、朝会で発表している。なるべくみんなで周知して、再発を防いでいる。しないようにはしているがまた起きてしまったら、また話し合っている。怪我の記録だけでなく対策を話し合い、保護者へ伝える時も対策も伝えている。ひっかき噛みつきも、またとなってしまうと、呆れていたのが怒りになってしまうので対策を取る。もう一つ直接関係するか分からないが、あるところで見守る保育と言うことで、子どもが戦いごっこを見守っているというのを聞いたことがあるが、けがをさせる、暴力はどんな理由があっても、止めないといけなく思っている。危害を加えることは止めるべきだと思っている。肉体的なことだけでなく、言葉の暴力も断固として止めるべきだと思っている。昨日妻とも話したが、昔の歌をTVでやっていた時に、昔はヒーローごっこをした。昔は悪者が最後やられた〜と終わり、ヒーローが勝っていたが、今はどちらが正義ではなくて、相手を打ち負かせることが目的になっていて、私はさせるべきではないと思っている。戦いごっこは基本的に反対。TVの影響が大きい、TVの影響と言っても週に30分。毎日8時間以上している保育に負けるのかと思う。発達上よくいうが、

紙を丸め棒を長くすることはよくしがちだが、剣に見立てて戦いを始める。それはほかに遊ぶ方法を知らないから。それを先生は釣り竿にするとか、今だと松ぼっくりとかにして、磁石で釣るとか、細長い棒で他の遊びを提案する。それを提案すると同時に効果があるのは、やめさせるというよりは全員が悲しい顔をする。子どもは好きな先生を悲しませたくない。むきになると面白がるので悲しそうな顔をすることです。そういうことで、人に危害を加えることや暴力をふるうようなときは止めないといけない。けがをせず絡み合っている時はよく見ていないといけない。同じケンカでも、怪我をしない場合は怪我をする限度を見て、けがをしそうだったら止めないといけない。これは見守る以前の問題。大人の力で解決するのではなく、話し合いにもって行って落ち着かせて、子ども同士で話し合うことは必要。体力勝負のケンカはさせるべきではない。これは力が強い方が勝ってしまう。見守ると言っても、子どもの発達をしっかり見ること、子どもにしてほしくないことは断固として止めるべき。これは絶対にしてはいけないことは示すべき、子どもは経験を積み重ねることで、何がいいことで悪い子とかが分かってくる、障がいの子の場合は違う世界を見ていることがあるので、動作やいいことをしたらシールをあげるとかしないといけない。ちょっと対応が違うが、そうでない子に対してはきちんと止める。言葉の暴力も含め、断固とした態度をとるべきだと思います。

本稿は、2017年11月27日、28日に行われたリーダー研修2017のQ&Aの内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)

講師略歴

森口 佑介氏（もりぐち ゆうすけ）京都大学大学院教育学研究科 准教授

【専門分野：発達心理学】

ヒトに特徴的な心の特質が個体発生の中でいかに出現するかを解明したいと考えています。特に、セルフコントロールと想像力に焦点を当て、乳幼児期や児童期、青年期におけるこれらの能力の発達的变化と、その生物学的基盤を、行動観察、行動実験、視線計測、生理指数計測、脳機能計測などの発達認知神経科学の手法を用いて検討します。中心的な研究テーマは、セルフコントロールと想像力ですが、それ以外の研究も行っています。

【主な著書】

『わたしを律するわたし 子どもの抑制性機能の発達』京都大学学術出版会 2012年

『おさなごころを科学する 進化する幼児観』新曜社 2014年